

## 苦難に対する態度

——苦難の人ヨブを中心として——

### 序

山と盛りあげられた白骨の前に立ち、私は言葉も無く、涙ぐむ。焼け潰れた安田邸が、旧主の亡霊を偲ばしめるやうな形をして立つてゐる。

まだ、そここくに注意して見ると人間の骨片が出てくる。三万四千人が一度に焼き殺されたと云ふその惨状を思ひ浮べて、私は云ひ現はす可き言葉も無い。

その日に人間の身体に火がついて、消さうとしても消え無かつたと、人は云ふ。倒れたものはみな口から血を吐いて倒れたと云ふ。三万四千の生霊が、黒板のチョーク画を拭き消す如くに地上より消え失せて了つた。

考へてみると痛ましいことである。人間は松火のやうに燃え上り、火焰の旋風に巻き上げられ、火玉となつて、遠くまで飛んで行った。痛いとか、苦しいとか云ふことはもう過ぎ去つた事実であつた。

た。凡てが超越的の出来事のやうに見える。私はそれに就てわからぬことが多くある。然し私はかく信じた

い。

神は、この苦痛を以つてしても猶、愛であるとして——  
苦難は私共に取つては善き賜である。死さへ、神の御心である。神の懷にて凡てが溶解せられてゐる。私は凡ての苦難を持つてしても猶、神を疑ふことが出来ない。私は變転の凡てを甘受する。

万能の中には苦難の出現をすら可能とする。私が神となる日、私は喜びの反対である苦痛をも造るであらう。私が神であれば、生の反対である死を創造するであらう。

万能の意味は、苦難の創造に対しても制限が無いと云ふことである。全能の意味には生と共に死をも創り得ると云ふことが含まれてゐる。

無から有を、苦難より喜びを、死より生を創造し得るものは、有より無を、喜びより苦難を、生より死をも創造し得るものでなければならぬ。

神の爲めに制限の牆壁を結び、「何故なればおまへは、悪を作り、苦難を撰び——」と問ひ得やうぞ？

全能者に制限は無い。神の爲めには、凡てを許容せねばならぬ。全能者の手に陥るものは苦難と死の賜を甘受せねばならぬ。それが創造の秘義である。悲しむものが幸福であり、饑え餓くものが幸福であり得る生活はたゞ全能者の手に陥り、創造の秘義より出発して、神の全能なる芸術に参与するもののみそれを味ひ得るのである。

苦難は芸術の終点に立つ。全能者のみこの芸術を味ひ得るのである。苦難はそれのみが終点ではない。生命の芸術に於て、変転の可能性を信するものが、之を受取り得るのである。

苦難を創造するものは神であることを信じ得るもののみがそれを芸術とし受取る。

十字架の芸術はそこにある。神の芸術は苦難を蒔いて生命を刈り取ることにある。一粒の麦を地に落して万粒を刈り入るゝことにある。

苦難の籤をひくものは、神の籤をひくものと考えなければならない。

苦難のみを思ひつめるものはそれに打勝つことを知らない。然し、神の為に苦難を忍ぶものは、苦痛を芸術化する。

苦痛が美と変るのはその心持ちから出発する。誰しも十字架は悲しいこと、いやなこと、むごつけ無きことである。然し大工イエスに於ては十字架が反つて法悦の輝きであつたと云ふことは、苦難をすら聖化し甘受し得るものは、他に余す可き聖化が無いからである。

苦難の聖化は、神の最後の芸術である。苦難にすら打捷つものは、他の凡ての喜悦に打捷ち得るにきまつてゐる。

見よ、苦難は最高の芸術では無いか？ 世界苦を除き得るものは、他に残す可き悪が無いではないか？

苦難は相對の世界に立つものには永遠に残る。相對よりよう脱却し得無いものは、苦難に捷つ可き道を知らない。絶対の秘義に這入り得るもののみ、それに打捷つ可き秘義を知る。絶対なるものは生命の外には無い。

延び上り、打砕き、苦難の中に飛び込んで行く、生命は苦難に怖ぢない。苦痛は生命に取つては、實在の本質では無くして、その附録であり、裝飾である。

苦痛が生命の裝飾であることに感付くものは、苦痛を怖ぢ無い。生命に対する幕間は暗黒に見えても、それで苦痛の総量を計算することは出来ない。生命は苦痛よりも強い。被服廠跡にまた青草が萌え出で、バラックの中に人間が群がる。生命は火焰より強い。

地球が、太陽系の一角に植えられてから幾兆万年経つか私は知らない。火の海を冷えさまさせて、大地を海の中から生え出ださしめ、地震と、噴火と、暴風と、洪水の激しき變動を越えて、アミバ

ーを人間にまで造り上げた宇宙の内なる神は幾百万年の變動を置いて、退化の道をお取りにはならなかつた。

神から云へば、折には悲觀したことも有つたかも知れ無い。その中でも、神は凡ての苦難を貫いて、人間創造にまで成功したのである。或時にはあまりに打続く大爆発と大噴火の為に炭酸瓦斯が地

殻の表面を蔽ふて、高尚な動物らしいものが創れなかつた時代もあつたらう。大蜥蜴が地上を、そのそと歩き廻り、有肺魚が、その醜

い姿で地上を探険に出かけたこともあつたのだ。その後また炭酸瓦斯が凡て水に溶けおとされ大蜥蜴が一度に斃死せねばならぬやうな

こともあつた。然しそれでも、神は失望しなかつた。

神は生物進化の道程の手をゆるめ無かつた。失望するなよ、若き魂よ、神は嘗て失望したことが無いではないか？ 苦難は彼に取つては完全な芸術である。

ナザレのイエスは死を彼の芸術の一種と考へた。彼はそれに対し

て何等臆する処が無かつた。殉教者に対して苦難は光栄の極致である。

そうした場合に、苦痛は苦痛としての本質を全く失つて了つてゐるのである。悦んで受け得る苦痛は苦痛の苦痛では無い。それは光栄の一種類である。

光栄の苦難に参与せよ、神に忠なる若者よ、神に生くるものには、苦難の流血は寶石にも勝る。たとひそれが平凡時の平凡なる苦難であるにしても、苦難は勝利によつて呑み亡ぼさるべきものである。苦味は陶醉者の口舌にはこの上なき芸術である。

苦き杯を逃げるな、友よ、「み心の儘に」を神に告げよ！ 苦杯を盛られる日に真実の芸術があり得る。強くあれ、神の如く強きものには、苦痛は北斗星の如く、良心の芸術として好愛せらるる。苦痛によつて愛が密着する。之れを受難の真理と云ふ。苦難を通過せざる愛は、愛の真実を持た無い。愛が鍊はれる為めには苦難の鍛練が必要である。

神の打ち下ろす苦難の鎚にひるむな、苦難の火花は芸術の最後の至聖所である。此処に入るものは選ばれたる至高の魂である。

受難によつて、仲保者になるが善い。受難の芸術は人を神に造り換へる唯一の道である。苦痛は、神とその子等のみが負ひ得る光栄である。苦難を甘受るものは、最後の階段に登る。そこに、神は直接その魂に囁く。

## 第一章 苦難に対する態度

### 維摩経とヨブ記

苦難に対する態度を記述した宗教書が、東西に一つ宛ある。一つは仏典の維摩経であり、一つは旧約聖書のヨブ記である。而も茲に一奇とすべき事は、此の東西の両書が、期せずして、共にその構想が劇になつて居る事である。

維摩経は仏教全盛時代に書かれたるもので、多くの仏典中最も秀れた文学である。そしてその全部の構想が劇になつて居る。此の維摩経を読んで行く裡に例へやうもなく私を喜ばせた二つの事項があつた。その一は信仰といふものが特段な工夫に依つて得られるものでなく、平々凡々の日常生活の中に発見し得らるゝものであると教えてゐる事。その二は維摩経が維摩詰といふ一人の人物を拉し來つて、苦痛に対する態度を決定してゐる事である。

釈尊が、維摩詰の病床に呻吟してゐると聞いて、弟子の一人をその枕辺に見舞はしめやうとしたが、小乗の哲人と賢人等の中、進んでその役を引受けやうとする者がなかつた。之れ蓋し、維摩詰が徹底した人であつて、くだらぬ人物が見舞に行つても却つて維摩詰の気を悪くする許りだと思はれたからである。その結果、釈尊門下の賢人として自他共に許した文珠が、代表して維摩詰の病床を訪れる事となつた。